

現代俳句集成

別卷一

編集委員 山本健吉・森澄雄・草間時彦・飯田龍太

現代俳句集成別卷一〔文人俳句集〕

出書房新社



現代俳句集成別卷一〔文人俳句集〕

昭和五十八年一月二十日 初版印刷
昭和五十八年一月三十日 初版発行

〔編集委員〕

山本健吉

森 澄雄

草間時彦

飯田龍太

著 者 尾崎紅葉他

装 画 日 高 靖

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三三―二

電話 四〇四―一二〇―（営業）

四〇四―八六一―（編集）

振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 中央精版印刷株式会社

製本 大口製本印刷株式会社

Printed in JAPAN ©一九八三

別卷一 目次

尾崎紅葉「紅葉句帳」(抄).....	七
森 鷗外「うた日記」(抄).....	九
夏目漱石「漱石俳句集」(抄).....	二九
石橋忍月 忍月句集	三〇
芥川龍之介「澄江堂句集」.....	三九
室生犀星「魚眠洞發句集」.....	四六
瀧井孝作「折柴句集」.....	六七
巖谷小波「さぶら波」(抄).....	一三三
寺田寅彦 寅日子句集.....	一三五

泉	鏡花	鏡花句集	……	二七
久米正雄	「返り花」	……	……	二九
北原白秋	「竹林清興」	……	……	二七
内田百閒	「百鬼園俳句」	……	……	二二
日夏耿之介	「婆羅門俳諧」	……	……	三五
幸田露伴	「蝸牛庵句集」	……	……	三五
橫光利一	「橫光利一句集」	……	……	三五
永井荷風	「荷風句集」	……	……	二七
三好達治	「柿の花」	……	……	二八
佐藤春夫	「能火野人十七音詩抄」	……	……	二九
田中冬二	「麦ほこり」	……	……	三五

木山捷平 春日抄……………三五

安東次男「裏山」……………三九

吉屋信子「吉屋信子句集」(抄)……………三七

永井龍男「永井龍男句集」……………三四

上林 曉「木の葉髪」……………三五

井本農一「遅日の街」……………六一

北園克衛「村」……………三九

結城昌治「歲月」……………四七

解説―村山古郷……………四二

現代俳句集成別卷一〔文人俳句集〕

凡例

- 一 収載した句集は、原則として初版本を底本に用いた。
- 一 仮名づかいは底本通りとし、漢字は新字を用いた。なお、底本に明らかな誤植がある場合は、これを訂正した。疑問の箇所については、右側に小さく（ ）で補記した。
- 一 句集の配列は、各句集の発行年月日の順に従った。（但し、著者没後に刊行された句集については、その没年月日まで繰り上げた。）
- 一 「紅葉句帳」「漱石俳句集」「さぶら波」「吉屋信子句集」の選句は、いずれも村山古郷氏による。



尾崎紅葉「紅葉句帳」(抄)

〔尾崎紅葉〕(一六七)一六三

作家。慶応3年、東京芝に生れる。本名徳太郎。東大予備門在学中の明治18年、山田美妙・石橋思案らと硯友社を結成し、華々しく文壇への第一歩を踏み出したが、このころから俳句にも親しむようになった。明治23年、巖谷小波・泉鏡花・小栗風葉らと俳句結社紫吟社を興し、その作品を「江戸紫」に発表した。また28年、角田竹冷と秋声会を創立し、機関誌「秋の声」を創刊した。この間「伽羅枕」「多情多恨」「金色夜叉」など次々と小説を発表し、明治文壇を代表する存在となる。一方、俳句に対する情熱も衰えることなく、34年には紅葉選による「俳諧新潮」を上梓。句風は、初期には談林風を好み、旧派的なものが多かったが、晩年には日本派風な正調に戻り、新派作家としての風格を具えるに至った。明治36年没。句集に

『紅葉山人俳句集』(明37)『紅葉句帳』(明40)『紅葉句集』(大7)がある。

〔紅葉句帳〕

明治40年4月8日、文禄堂書店刊。定価七十銭。四六判、本文一六八頁、附録(散文)一四頁、志のぶくさ(追悼文)一六頁。口絵三葉(絵及び筆跡)。目次なし。収録句数は一〇二句、その中から二〇〇句を抄録。

紅葉句帳

新年

寄山祝

御代の春尾上の松を飾りけり

田家煙

煙立つ庄屋も藁屋も雑煮かな

1901の新年を迎へて

こゝに四海の船来り賀す君か^か春

二十世紀なり列国に御慶申す也

ほの^くと鶴を夢みて明の春

正月四日翠溪松洲の二子と住吉明神に詣でよ

神の春真妙に玉の響あり

混沌として元日の暮れにけり

少年行

酔ひつれて雪駄鳴すや松の内

初空の戦^くや鶴の羽撃つほど

今年は(裏中)

不相変と申すのみなる御慶かな

山莊客を見ずて大臣の試筆かな

猿曳の猿を抱いたる日暮かな

屠蘇の酔大福長者となりにけり

ひそ^くと雑煮食ひたる夫婦哉

買初の細君しはきめでたさよ

蔵開するや閑居の小抽斗

若餅に輝く松の旭かな

子役者の来て手鞠つく廊下哉

羽子板の裏や恋歌のぬすみ書
初刷に出たりな古き傀儡師
小机に載せてこそあれ初暦
古鍋の中に煮え立つ若菜かな

春

病中

竹聴いて居る春寒の廁かな
暖にひろい歩きの病後哉
春寒や日閑けて美女の嗽く
袴着て此冴返る日に出る事か
握飯十もさげたる日永哉

出字

出そびれて此うらゝかを如何せん
暮かぬる門や嫁入のさんさめき
春の夜や柳かくれの細ともし
杯を挙げて礼延の窮窟を悲しむ
春の夜を膝も崩さて居る事か

閨の戸の細目にあきて朧月

悼

泣いて行くウエルテルに逢ふ朧哉
乳捨てに出れば朧の月夜かな
銚子にて

汐曇筥屋に春を惜む日ぞ
千仞の巖に人立つ霞かな
東風吹かば帰るといひし夫かな
初虹や岳陽楼に登る人

春雨や蓑の下なる赤い魚
水道工事其半なる雪解かな
辻待の俤置いたる雪間哉
畑打の右も左も名所かな
過ぎがてに摘草するや小前垂
菊植ゑて竹の下庵暗からすす
雛子打の濡れて帰るや草の雨
子雀や遠く遊はぬ庭の隅
轉の下に小き祠かな
三女を三千代と名けて
我庵や三人よつて百千鳥
行雁の思ひきりたる高さ哉

しらしらたらくや朝飯おそき白魚鍋
見事さに蛤ひとつ焼れけり
梅散るや衣紋あだめく人の脊
病中
梅の道白玉楼も遠からず
病中
楊柳の風寒からすす灸熱からすす
欲字
欲しかりし雨海棠に來りけり
連翹山吹門に春慶庵と題す
垂籠めて花に物縫ふ世帯哉
飼猿のかしこまりけり花の庭
花も看すすて落第の秀才帰る也
陶友会の記
窯の火や落花の風の吹くまゝに

肌ぬぎの襦袢も桜衣かな

風の桜貴妃か簪を拾ひけり

相楽極楽院の老桜を見て

桜咲く四十九院の柱かな

夜桜の鐘聞得たり寒山寺

木芽吹く垣根伝ひの禿や誰

日一ぱい籠一ぱいの土筆かな

ちく／＼と潮満来るや芦の角

伊豆人のしたゝかくれし山蕨哉

縁行けはびしよ／＼雨の馬蘭哉

夏

遠方を大暑をしかも女客

日傭の鋏を鑄て居る大暑哉

日盛の坂おし上くる車哉

読売新聞九千号

更に上る一層楼の雲涼し

佐渡が島を望みて

来いといふ人あれ島は涼しけ也

某酒家の団扇に 千客万来不要敵

月涼し杉葉の門の明放し

青嵐尾上の鐘を繞りけり

おごそかに離宮閉ちたり青嵐

梅雨の窓其子の親も覗きけり

先達の大声に呼ぶ清水かな

妙高山を望みて

夏山の雪見る雲の絶間哉

夏川や行きて憐む石の瘦

風もなく壁に掛けたる単衣哉

松井田

夏衣碓水の雨の灑く哉

帷衣によき風の吹く酒楼哉

日高きに垂れたり櫛の黄めるを

蚊帳の月美人の膝を閑却す

端近に飯食ふ人や青簾

有明の月照しけり竹婦人

雨を帯ひて麗はしの粽到来す

打水や井戸をほしたる男とも

水飯や簾捲いたる日の夕

水飯に巻を掩ひぬ南華經

日中の盃把りぬ洗鯉

斗酒ありや日暮れて胡瓜刻む音

麴や遂に輸したる湯一碗

松風の納豆仕込む精舎哉

一家族格列拉を避けし筈屋哉

赤倉にて

口あいて佐渡が見ゆると涼みけり

人訪へは梅干してある内儀かな

干瓢むく孤村の風の日暮哉

木の下に其の梅漬ける小庭かな

とばかりに雫やみけり釣葱

稗詩の離々として嗚呼鶴病めり
葭雀の終日啼いて水長し
うるさきもの一錢蒸汽行々子
釣るゝとも見えぬ小舟や行々子
天渺々海漫々中にひよつくり鰹舟
佐渡を望みて
修善寺大川屋の団扇に
鮎看るへく流聴くへく溪の石
螢籠微風の枝にかゝりけり
初蟬のぢいとばかりに松青し
恋衣起きては蚤を振ひけり
蚊蜻蛉隻手を挙げて仆しけり
灯取虫外に出て居る宵の人

賤の女の誰待つ恋そ蛎の中
寂莫と庵結ふや蛎の中
日長けたり出窓に並ふ花薔薇
舞踏の人薔薇花前に語る哉
家に窓窓に雨ある若葉哉
近道や茭白うしてうす暗き
梭欄の花咲くや山寺の侘しらに
柘榴古りて一斗の花を落しけり
温泉
藻の花や名もなき水の夕まぐれ
家貧に茂りもあへず麦門冬
対膳嘲妻
吾妹子も古ひにけりな茄子汁

秋

飯坂花水楼

食客の病みて秋立つ二階哉

枕上逢秋

病魂新弱

ごぼくと薬飲みけりけさの秋

銀屏風立てし残暑の月夜かな

飛込んでぬるき朝湯も秋なれや

風葉子必携夜伽一壺

火を吹くや夜長の口のさびしさに

病中

莫児比涅も利かて悲しき秋の夜や

森川町男世帯

うらがれの庭からつゞく勝手哉

風少し鳴らして二百十日哉

秋風の袂をさぐる酒銭哉

露けさに犬の起き行く垣根哉

二三里の妹かり行くや露の中

病中

死なば秋露のひぬ間そ面白き

夕霧やけふの泊の灯か見ゆる

とにかくと銃かたけ行く霧の中

露霜や蓬生の宿に人病めり

秋の雨漏るや古駅の枕もと

秋の雨庭に灯して眺めけり

天の川地に提灯のひとつ行く

病中不犯盗

我をして月前愁しむる勿れ